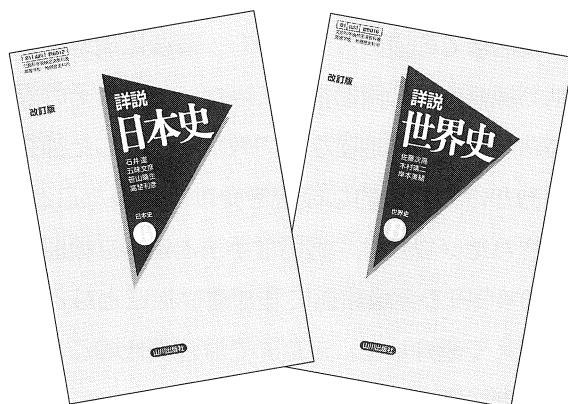


いま「国土」の教育はどう行われているのか －過去と現在、そして将来世代にむけて－

[第4回] 高等学校歴史教科書と「歴史の深層としての国土」

森田 康夫*

シリーズ最終回となる今回は、高等学校の歴史教科書（平成22年度の東京都立普通科高校で採用数最上位の山川出版社の「日本史B」、「世界史B」教科書）を取り上げ、『国土教育』の視点からみた現状を整理するとともに、高等学校歴史教育の今後の改善の方向性について私案をとりまとめた。



1. 高等学校「日本史B」教科書の比較

現行の平成18年検定済教科書「詳説日本史 改訂版」、昭和55年検定済教科書「詳説日本史 再訂版」、および昭和31年検定済教科書「四訂 日本史」（いずれも山川出版社）を対象として、「日本史」が『国土教育』に果たしている（果たしてきた）役割について比較・検証した。

* 國土学アナリスト、國土交通省國土技術政策総合研究所（総合技術政策研究センター）
THE PRESENT SITUATION AND A IMPROVEMENT SCHEME OF HISTORY EDUCATION IN UPPER SECONDARY SCHOOL (by Yasuo MORITA)

その結果、過去の教科書に比して現行の教科書は、学習指導要領の内容の変遷に伴い、①全面カラー化されビジュアルになった、②「歴史の追究」というテーマ学習項目を設けて、日本と諸外国との関係に目を向けたテーマ「世界の中の日本」や民俗学的な部分に踏み込んだテーマ「日本人の生活と信仰」を取り上げるようになった、という特徴を持つものの、「日本史B」という科目が教える内容は、半世紀の

第1回：小学校社会科教科書と郷土教育・リテラシー (4月号掲載)

1. みんなが幸福になれるように
2. 国土を学ぶということ
3. 学習指導要領の変遷
4. 小学校社会科教科書の比較
5. メディアとリテラシー
6. 輿論（よろん）をつくっていこう

第2回：中学校社会科教科書と国土教育・ひと教育 (5月号掲載)

1. 中学校・地理分野教科書の比較
2. 中学校・歴史分野教科書の比較
3. 中学校・公民分野教科書の比較
4. 天は自ら助くる者を助く

第3回：高等学校地理教科書と地理教育の復権 (6月号掲載)

1. 高等学校「地理B」教科書の比較
2. 高等学校地理教育が抱える課題
3. 地理教育復権に向けた取り組みと今後の展望
4. 人事を論ぜんと欲せば先ず地理を觀よ

第4回：高等学校歴史教科書と「歴史の深層としての国土」 (本号)

1. 高等学校「日本史B」教科書の比較
2. 高等学校「世界史B」教科書の比較
3. 歴史の深層としての国土
4. おわりに（人と国土と信仰と）

間、依然として原始・古代以降のわが国の事件史・出来事史であることにかわりはないことがわかつた。

以下では、こうした「日本史B」の教科書に、『国土教育』的視点から、新たな風を吹き込むための2つのアプローチを提案したい。

1・1. 外からの視点

一つは、外国人の目から見た日本(日本人)の評価を組み込むこと。しかも、利害関係や感情論から対立構造になりがちな歴史上の出来事・事件を対象とするのではなく、その時々の日本社会や日本文化、日本人の姿を対象とするのがよい。日本人の視線から見た日本史ばかりをつくっていては、日本(日本人)の特徴の本質的な部分、市井の人々が生活している(していた)普通の日本人の歴史は見えてこないし、また、日本社会や日本文化の研究として妥当であるかどうかといったアプローチしか認めないとわれると、思考が止まってしまう。

どの時代にあっても、日本人にとって日常の出来事は、「日常」であるが故に語られることはないし、歴史に記録されることもない。逆に、日常発生することのない特殊な事件や出来事は、「非日常」であるが故に、また珍しいイベントであるが故に、重要なこととして記録され、結果、歴史上の重要事項としてクローズアップされることになる。

歴史家の渡辺京二氏は、著書「逝きし世の面影」において、幕末・維新の時代に訪れた外国人によるさまざまな手記、記録を細大漏らさず調べ上げ、それらを丹念に読み解いて、当時の日本人の姿を鮮やかに描き出している。科学技術にもとづく文明度からすれば、当時の日本は西欧諸国より数段遅れていたが、その生活習慣や人情風俗は、彼ら外国人を驚倒させるのに十分だった。江戸庶民が貧しくとも卑屈にならず、幸福で満足した生活を送っていること、異国人に対して親切さともてなしのよさを持ち合わせていること、物や自然に対する畏敬の念を失っていないこと、こうした日本人の美点の数々が、異国

からの訪問者の手で、大きな驚きとともに記録されている。本書を読めば、幕末から明治を生きた日本人が、今ではほとんど失われてしまった美德を、いかに自然に身につけていたか、ありありと知ることができる。

さらに、安政6(1859)年に初代駐日イギリス大使として着任したラザフォード・オールコックが、随所で日本の景観の美しさに心底驚き、たとえば小田原から箱根に至る道路の「比類のない美しさ」にさえ目を奪われた事実や、「日本の農業は完璧に近い。自分の農地を整然と保つことにかけては、世界中で日本の農民にかなうものはない」と田園と日本農業のありかたに唸ったこと、そして、オールコックがライバル視したタウンゼント・ハリスもまた「私は今まで、このような立派な稻、このような良質な米を見たことがない」と日本の水田の見事さに驚いていたという事実などは、直接『国土教育』の材料として活用したくなる興味深い内容である。

1・2. 市井の視点

私の提案の今1つは、文字として残っていない歴史「無字の歴史」「口伝の歴史」から学ぶことである。民俗学者の宮本常一氏は、日本全国をくまなく歩き、各地の民間口伝を克明に調査した結果を彼の代表的著書「忘れられた日本人」にとりまとめているが、そこでは、辺境の地で、文化を築き支えてきた伝承者=老人達がどのような環境に生きてきたかを、古老たち自身の語るライフヒストリーをまじえて生き生きと描かれている。

前段でも述べたが、記録に残してきた著名な人物や華やかな事件・出来事だけが日本史なのではなく、辺境な地に住む市井の人々の普通の暮らしにも聞くべき歴史がある、いや、こうした市井の人々の暮らしこそが日本人の真の歴史ではないか。

本文中、対馬における「寄りあい」の場面が出てくるが、村で取り決めをおこなう場合には、みんなの納得のいくまで何日でも話し合う、多数決で決めるような乱暴なことをしない、それが当たり前の

[Fernand Braudelの『地中海』に学ぶ]



図1 歴史の深層としての「國土」
[F・Braudel『地中海』の内容を参考に著者作成]

ルールだったそうだ。これこそが、本来の日本人の文化であったのではなかろうか。

2. 高等学校「世界史B」教科書の比較

「日本史B」と同様に、現行の平成18年検定済教科書「詳説世界史 改訂版」、昭和54年検定済教科書「詳説世界史 再訂版」、および昭和31年検定済教科書「世界史」(いずれも山川出版社)を対象として、「世界史」が『國土教育』に果たしている(果たしてきた)役割について比較・検証した。

結果、過去の教科書に比して現行の教科書では、学習指導要領の内容の変遷に伴い、①全面カラー化されビジュアルになった、②「日本史を含めた世界史である」ということを意識した記述がなされるようになった、③近代史のウエイトが若干高くなり、逆に西欧史のウエイトが若干低くなった、という変化は認められるものの、「世界史B」という科目が教える内容は、半世紀の間、依然として「ヨーロッパ中心史観にもとづく事件史・出来事史」であることにかわりはないことがわかった。

したがって、「日本史B」同様、國土形成の歴史や國土整備の効果、國土整備に携わってきた人々の苦労などの『國土教育』を学ぶ材料として、現行の「世界史B」に効果的な役割を期待することは難し

いといわざるを得ない。

3. 歴史の深層としての國土

3-1. 「地中海」に見るF・ブローデルの歴史思想

フランスの歴史学者、フェルナン・ブローデル(Fernand Braudel, 1902~1985年)が、16世紀のスペイン帝国とオスマン・トルコ帝国が霸権を争っていた時代の地中海を登場人物として、過去に類を見ない野性的な歴史書「地中海」(正式には「フェリペII世時代の地中海と地中海世界」)を著してからすでに半世紀以上の年月がたっているが、人類は彼の偉大な遺産を生かし切れているであろうか。

「地中海」では、空間(地理的条件や自然環境)が歴史において果たす役割に焦点が当てられるとともに、歴史(時間軸)が段階的に成層化された三つの次元、つまりは「地理的な時間(長期)」「社会的な時間(中期)」および「個人の時間(短期)」に区別され、大きな、生きた、そして全体の歴史が三部構成で展開されている(図1)。

第I部では、「ほとんど動かない歴史」、「人間を取り囲む環境と人間との関係の歴史」、「ゆっくりと流れ、ゆっくりと変化し、しばしば回帰が繰り返され、絶えず循環しているような歴史」が取り上げられている。これは「長期持続の歴史」や「深層の歴

フランスとピエモンテの間のアルプス山脈



「山は、ふつう、都市や低地国の創造である諸文明から離れた世界である。山の歴史、それは諸文明をいささかも持たないことであり、ほとんどいつも文明普及の大きな流れの周縁にあることである。(中略) 十六世紀には至るところで、高地の世界は、地中海の支配的な諸宗教にほとんど興味を示さない。至るところに、山岳生活のずれがあり、遅れがある。」

ローヌ川のデルタ



「平野は、もとは淀んだ水とマラリアの領分であったという事実がある。あるいは大河の変わりやすい水が溢れ出てくる地帯であった。人の住む平野、これは今日では繁栄のイメージであるが、それが達成されたのは遅く、何世紀にもわたる集団の努力の骨折りの結果である。」

図2 「地中海」より⁹⁾

史」というキーワードでも表現されているが、山地の地理的制約とそこに住む人々の暮らし、平野における土地改良の歴史、気候の変化とそれに伴う農作物の収穫、パンの値段の変動、あるいは交通路としての陸路や海路、航海の仕方、都市の機能など、人間と人間を取り囲む地理的環境との関係がここでは詳細に調べ尽くされている。

次に、第Ⅱ部では、この動かない歴史の上に姿を現す「緩慢なリズムを持つ歴史」、「さまざまな人間集団の歴史であり、再編成の歴史」が取り上げられる。そこで語られるのは、経済(時間距離の障壁、人口動態、貴金属の流入と物価上昇、地中海産小麦の均衡と危機など)であり、国家(オスマン・トルコ帝国とスペイン帝国の起源、官僚制度、地方自治、財政難など)であり、社会(領主、農民、ブルジョワ階級の変化、窮乏と強盗行為など)であり、文明(キリスト教世界とイスラム教世界、ユダヤ人の運命など)であり、戦争の諸形態(戦争と技術、国家、文明との関係など)である。

そして最後の第Ⅲ部に至ってようやく、「伝統的な歴史」、「出来事の歴史」が登場する。具体的には、レバントの海戦(1571年)をはじめとする戦争の歴史、外交の歴史が語られるのである。ブローデルはこの階層の歴史のことを「深層の歴史」に対して、「表面の動搖であり、波立ちである。短く、急であり、

神経質な揺れを持つ歴史である」と説明している。

ブローデルは決して第Ⅲ部で語る事件史、出来事史をおろそかにしていた訳ではないのだが(実際、第Ⅲ部の分量は、浜名優美翻訳「地中海」全5冊中2冊に及ぶ)，第Ⅰ部において、人間を取り巻く地理的環境という「空間」の問題を、長期の「時間」のなかに統合した点にブローデルの独創性があるといえる。彼は、地理(=自然)の基礎をなす多種多様な要素が、人間に加えるさまざまな強制力や圧力を複合的な理論に要約することによって、「歴史地理学」の基礎概念をつくりあげた。

山地の圧倒的な(自然の障害としての)存在と山岳民が不可避的に取るきわめて独特の暮らし方や、四季の変化が戦争と平和のリズムや力学そのものにもたらす影響、地中海に統一性をもたらす交通路の必然性とその交点としての都市(人とモノと情報の交換・集積の場)の存在、そして交通路と都市によって規定される経済など、こうしたさまざまな事象を膨大な数の論文、報告書、書物、出版物等を駆使しながら、ブローデルは「地理環境」が人間の歴史プロセスに対して「いかに決定的な影響を及ぼすか」という問題に綿密な解釈を施し、地中海世界の地理的(=自然的)な基礎と、この空間に生きる人間のために築きあげられた地中海文明の諸形態との間に、有機的な関連が実際にあることを明らかにして見せ

たのである。

3・2. 「歴史地理学」と「国土」の概念

ブローデルは、また別の著書において、「人間は近視眼的であって、その物差しも短く、環境による変化をしかとは測れません。しかし、歴史地理学とはまた、空間と格闘する人間の歴史、努力と苦難に満ちた闘争の、また忍従の歴史、そして繰り返される労働の果てに人間が空間に対して収める勝利の歴史なのです。つまり、歴史地理学の研究とは、自然から人間へ、人間から自然へという二重の関係を常に孕んだものなのです。そこでは、當時混じり合い、絡み合い、際限なく繰り返される作用と反作用のさまが考究されるはずです。」と語り、さらに「交通」や「農業」や「都市」を取り上げ、「要するにこうした人間と距離との格闘は、人間の歴史における大規模かつ重要なドラマの一つなのです。そして今日、このドラマはまだ終わってはいません。」「それ(距離)以外の面でのー田畠や、森や、家畜や、町や、家を確保するためのー人間の格闘の歴史を見なければなりません。(中略)田園とは、人間の、人間の道具の、人間の苦労の、そして人間の共同体の創造なのです。」とその想いを熱く語るのである。

つまり、歴史学というものは、自然環境を人間の尺度(人間集団の尺度、人間社会の尺度)で見つめ直すこと(=「歴史地理学」)であるとブローデルは断言するのであり、それが故に私は、この「歴史地理学」こそが『国土教育』の骨格であるということを確信するに至ったのである。

歴史の目で見るからこそ、ブローデルのいう「自然環境」(筆者のいう「国土」と人間の関係が、一歩引いた目線から俯瞰的に見えるのだ。例えば、人間と距離との戦いが「交通」であることは、現在の目線からのみでは、明確に読み取ることはできない。現在の目線からは、地理、民族、経済、法律、社会、技術、土木といったものそれぞれが分割され、ばらばらにしか見えない。だからこそ、いかに「国土」が人間にとて重要で、「国土」への働きかけ

と「国土」からの恵みの相互作用によって人間の生活が保たれているか、人類の幸せが担保されているかということをわれわれは深く認識しなければならないのである。

3・3. 高等学校世界史教科書を比較する

歴史教育者でもあったブローデルは、1963年にリセの最終学年(わが国の高等学校3学年)向けの世界史教科書(初版)を作成している。

以下では、ブローデルによって書かれた世界史教科書「文明の文法(世界史講義)」と前出の高等学校世界史教科書「詳説世界史B」(山川出版)との違いを明らかにすることで、『国土教育』的視点からみた「世界史B」の改善の方向性(私論)としたい。これは、「歴史地理学」を基調とする世界史教科書の作成を提案することに他ならない。

(1)取り扱う対象の違い

ブローデルが扱っている事象は、文明(その構成要素としての信仰、人間科学、自然科学、哲学、芸術、工業(技術)等)であり、またこれらの基礎構造としての人間集団、民族、都市、交通、国家、空間(=自然環境)である。特定の個人や事件・出来事に関する記述は、説明上必要不可欠な程度に限定されている。

(2)ストーリーの違い

ブローデル教科書では、文明単位、国家(地域)単位で章・節立てがなされ、それぞれの空間領域の中で、過去から現在までの時間軸に沿ってストーリーが展開されているのに対し、山川出版教科書では、古代から現代に至る全世界の歴史を、ヨーロッパを中心史観に沿った1つのストーリー(1本の時間軸)に押し込めて説明しようとするが故に、ヨーロッパ以外の文明、国家(地域)、民族については、切り刻まれたバラバラの歴史としてしか見ることができない。このことは、信仰(宗教)や人文科学といった歴史にとって極めて重要な事項に気付き、学ぶことができないといった、わが国高等学校世界史教育の大きな障害となっている。

ヨーロッパ文明は、過去(395年)から現在に至るまでずっと、キリスト教と二人三脚で歩んでいるのであり、無宗教を標榜する人ですら彼等の行動規範は全てこのキリスト教によるのである。同様に、アメリカ合衆国は典型的なプロテスタント国家なのであり、民族は違っていてもイスラム教を信ずる人々は、イスラム教文明という共通の傘の下で生活しているのである。歴史とは文明ごと、国家(地域)ごと、民族ごとに見ようとしなければ、ほとんど意味をなさない。

(3) ヨーロッパの位置付けの違い

ブローデルは、「ヨーロッパはアジアの一半島である」「はるか遠き東部(ファー・イースト)」であるというスタンス、ヨーロッパに対して一旦距離をおいて考えるというスタンスに立ち、非ヨーロッパ文明(イスラム、アフリカ、中国、インド、日本等)から執筆をはじめている。また、全体頁数に占めるヨーロッパ(西欧)の記述分量は、山川出版教科書が42%(143頁／340頁)と過半数近くを占めるのに対し、ブローデル教科書では極東の27%(139頁／507頁)に次ぐ23%(116頁／507頁)という扱いである。

しかし、ブローデルはヨーロッパを決して軽視している訳ではなく、むしろフランスという国家が、フランス人こそが、ヨーロッパ中心の世界史の中において、政治・文化の主導的役割を果たしてきたのだという自負を持って、世界史教科書に誇り高き自己フランスの伝統を書き込んでいるのである。

(4) その他(日本の歴史に関する記述)

ブローデルは極東の最後の下りで日本を取り上げ、23頁を割いて日本という国の歴史を、日本人の特徴を見事なまでに表現し尽くしている。

- ・「日本は人の住むさいはての国である。」
- ・「列島である日本は、しばしばイギリス諸島と比較されてきたが、しかしイギリス諸島が近接するヨーロッパ大陸に文字どおり接合されているのにたいして、日本はそれよりも孤立し、閉鎖的であるべない状態にある。」
- ・「きわめて早く6世紀頃から中国的日本とでもいうべきものが存在してきたし、1868年からは西洋的日

本がはじまり、その大成功は内外から認められている。しかし、こうした数々の重要な経験のそれとも、つまりは「日本的」日本の中に溶けこんでしまっている。この「日本的」日本なるものの島嶼的独自性は疑問の余地のないものなのである。小庭園と茶道と満開の桜の国では、中国経由で伝来してきた仏教でさえも日本風につくりなおされてしまう。」「われわれ西洋の尺度からすれば、日本はほとんど宗教的ではないし、来世にもほとんど関心がないのである。その意味でインドと対照的であるといつてもよい。日本にあって支配的なもの、それは、社会や教育や名譽の継承、そしてもちろんその文明なのである。」

4. おわりに －人と国土と信仰と－

最後に、『デンマルク国の話』(敗戦後、国民のたゆまぬ努力によって厳しい自然環境を克服し、豊かな国土、酪農王国を造り上げたデンマークの歴史話)に込められた内村鑑三の想いを、私なりに解釈し、紹介することで本シリーズを締めくくることとしたい。

「自分」は歴史の最先端に立っていて、その「自分」が未来を切り開いていかなければならぬ、覚悟をもって前を向いて生きていかなければならぬということに、また、歴史の深層には「国土」というものがあって、これを絶え間なく改善していかなければ、歴史の表面にある経済的出来事や政治的出来事を本質的に変えていくことはできないのだということに、そして、これらの実現のためには、信仰心に根ざした教育が不可欠であるということに、私たちは気付き、行動し、その責任を全うしていかなければならない。先人たちの努力に報いるため、現世代の幸福のため、そして将来世代の輝かしい未来のためにも。

【完】

【謝辞】本稿(連載企画／国土教育シリーズ全4回)をまとめるにあたり、問題の提起から、向き合うべき素材への気付き、人と国土との相互関係を時間軸と

空間軸から見る「国土学」の視点など、俯瞰的で示唆に富んだご指導と格別のご鞭撻を賜った大石久和先生((財)国土技術研究センター理事長、早稲田大学大学院公共経営研究科客員教授)に、深甚なる感謝を捧げます。

[参考文献]

- 1) 石井 進, 五味文彦, 笠山晴生, 高埜利彦(ほか9名)／平成18年検定済『詳説日本史 改訂版』, 山川出版社
- 2) 井上光貞, 笠原一男, 児玉幸多(ほか7名)／昭和55年検定済『詳説日本史 再訂版』, 山川出版社
- 3) 宝月圭吾／昭和31年検定済『四訂 日本史』, 山川出版社
- 4) 渡辺京二／逝きし世の面影, 葦書房, 平成10年9月
- 5) 宮本常一／忘れられた日本人, 岩波文庫, 昭和59年5月
- 6) 佐藤次高, 木村靖二, 岸本美緒(ほか3名)／平成18年検定済『詳説世界史 改訂版』, 山川出版社
- 7) 村川堅太郎, 江上波夫, 山本達郎, 林健太郎／昭和54年検定済『詳説世界史 再訂版』, 山川出版社
- 8) 村川堅太郎, 江上波夫／昭和31年検定済『世界史』, 山川出版社
- 9) フェルナン・ブローデル(著), 浜名優美(翻訳)／地中海(全5巻), 藤原書店, 平成3年-7年
- 10) 浜名優美／ブローデルと地中海の歴史について, 南山経済人クラブ講演録, 平成8年
- 11) I・ウォーラースtein他／『地中海』を読む, 藤原書店, 平成11年12月
- 12) I・ウォーラースtein, P・ブローデル他 浜名優美(監修), 尾河直哉(訳)／入門・ブローデル, 藤原書店, 平成15年3月
- 13) フェルナン・ブローデル(著), 浜名優美(監訳)／歴史学の野心 ブローデル歴史集成II, 藤原書店, 平成17年5月
- 14) フェルナン・ブローデル(著), 松本雅弘(訳)／文明の文法I 世界史講義, みすず書房, 平成7年7月
- 15) フェルナン・ブローデル(著), 松本雅弘(訳)／文明の文法II 世界史講義, みすず書房, 平成8年11月
- 16) 木下康彦, 木村靖二, 吉田 寅／詳説世界史研究, 山川出版社, 平成7年7月
- 17) 内村鑑三／後世への最大遺物・デンマルク國の話, 岩波書店, 昭和51年1月
- 18) 大石久和／国土学事始め, 毎日新聞社, 平成18年3月
- 19) 大石久和／国土学再考「公」と新・日本人論, 每日新聞社, 平成21年2月
- 20) 森田康夫／「国土教育」の視点から見た社会科教科書の検証と次世代教育論, JICE REPORT Vol.16, (財)国土技術研究センター, 平成21年12月
- 21) 森田康夫／『国土教育』(その2)高等学校地理歴史科教育を考える, JICE REPORT Vol.17, (財)国土技術研究センター, 平成22年7月